

---

**僕の平穩なる日常はやがて歴史を大きく変えるような世界の危機に変化することになる、**

響 航流

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

僕の平穏なる日常はやがて歴史を大きく変えるような世界の危機に変化することになる、

### 【Nコード】

N2758Z

### 【作者名】

響 航流

### 【あらすじ】

俺、水城御鷹の平穏な日常はある日突然の学校爆破によってすべて霧散した。

その後も妙な超能力を見せられたり、全てを知っている最強の少女に出会ったり、主人公が交代したりと、大忙し！？  
ちよっと待って！主人公交代ってどういう事！？

## 狂う前の物語（前書き）

稚拙な文章ですががんばります！

## 狂う前の物語

ピピピピピピピピ・・・

朝。

目覚まし時計の不快な音に目が覚めた。

カーテンの隙間から朝特有の眩しい太陽光が注がれる。

(眩しい・・・)

そんな当たり前の事を思いつつ、ベッドからはい出る。

学生にとって学校の平常授業なんて苦痛でしかない。もちろん俺の学校も今日は普通の授業だ。

立ち込める憂鬱感をなぎ払い、適当に着替えを済ますと、1階に降りる。

リビングの椅子に座ると、朝食を作る母親の背中が「おはよう」と使い古された挨拶。

その言葉を聞くと、『ああ、今日も昨日と同じ日常なんだ・・・』と、そう思う。

朝食をモムモムとほおぼる間に自己紹介でもしよう。

俺の名前は水城みずしろ 御鷹みたか。

高校3年生。

趣味は特にナシ。

特技も特にナシ。

さっきまでの光景を見てわかるとは思うが、ただの一般人である。今までも変わった経歴はナシ。

強いて言うなら、俺には父親がいない。

そして不登校の弟がいる。

ただそれだけ。

十分変わっている気もするが、それらが俺自身に何か影響を及ぼすことはない。

ああ。

あと、隣の家には幼馴染の女がいる。

お互い部屋がすぐ真ん前にあるため、時々ソイツが俺の部屋にやってくる（窓から）。

『それだけで十分お前は特別なやつだ。フラグ立てまくりじゃねえか』と友人Aに言われたこともあるが、それに慣れている俺自身にはその特別さは理解できない。

すでに俺に『イラッ』とか思った人もいるかもしれないが、我慢してください。

朝食を済ませ家を出る。

普通だ。ここまでは。

家から学校までは、徒歩3時間

殺す気が。

もちろんバス通学だ。

バス停までは徒歩5分程度なのでわざわざ自転車は使わない。

俺は、『普通』という言葉が嫌いだ。

高校生にもなつてまだ非現実には巻き込まれるという夢を見ている、というわけじゃない。

とにかく、新しい環境が欲しい。

自分の退屈な人生を変えてくれる、環境が。

要するに退屈が嫌いなわけだ。

どんな人間だってそう思うはずだ。きつと。

一般的人間の俺が言ってるんだからそうに違いない。

徒歩5分。駅に到着した。

そこにはうちの学校の制服を着た奴がいた。

それこそが先ほど話した、『幼馴染』というやつなのだ。

彼女の名前は榊ひなぎ雛姫

「おっ、みーくん！元氣してたかな？ちなみに私は元氣してなか

「ったよ」

「嘘つけ！バリバリ元気だろ！」

「元気してたかって・・・、昨日会っただろ。みーくんはやめろ」

「そーだったそーだった！えへへ」

このテンションに毎朝付き合わされてるわけだ。

これから始まる“普通”の学園生活に対する憂鬱感もすこしは晴れる。

「もー！遅いよー。バスいつこ行っちゃったじゃん！」

俺はこの言葉に、

「先に行けばよかったのに・・・」

なんてイジワルを投げかける。

この言葉を今まで何度コイツに言ってきたことか。

こういうとき、こいつは決まってこう言うんだ。

「だって、つまんないじゃん」と。

多分バスの中で話し相手がいなくなる、と言いたいのだろう。

その気持ちはわかる。

それこそ、“退屈”だ。

「・・・・・・・・あ。ホラ。バス来たぜ。行こう」

「うん・・・」

そうして俺たちはバスへ乗り込む。

バスは“変わらない日常”へ向けて、走り出した。

到着。

ちなみにバスの中はほとんど無言だった。

雛姫ひなぎも弟が不登校であることは知っているが、深くは聞こうとしない。

気を使っているのだろう。

今のアイツはそもそも部屋から出てこない。

ここ数ヶ月顔も見えない気がする。

「学校ってどう思う?」

「唐突にそんな事を聞かれる。」

「どうって……どうだよ……」

「いや、楽しいーとかめんどくさいーとかさー」

漠然としてるなあ……

「んー……。楽しい……。楽しい、し、めんどくさい。かな  
」？」

「それさつき私が言ったやつじゃん……」

「いやそうだけどさ、それ以外になんかあるか？」

「『愉快だ』！」

「『楽しい』の言い方変えたただけだろ」

いつも通りの適当な会話。深そうで深くない、普通の会話だ。

時間にはまだ余裕がある。

校舎に入ろうとしたそのとき。

何か、とてつもない違和感を感じ、立ち止まる。

そこには一人の女の子がいた。

制服のデザインが少し違うので、おそらく中等部の子だ。

髪型は……ツインテール？……ちよっと違うな。

どちらかと言うとおさげに近い気がする。

今の時代にしては珍しいとは思うが、それ自体は大して気に留め  
ない。

しかし、

その子は、髪の毛が金色だったのだ。

(金髪って本当にいたんだな……)

なんて率直な感想しか思い浮かばなかったが。

「どしたの、みーくん？」

「……いや。なんでもない。みーくんはやめる」

そして俺たちは教室へと向かった。

教室ではすでに来ていた早寝早起きの生徒たちがざわざわと話していた。

いつもこんな感じだが、今日はいつもに増して騒然としている。

「おい水城ー！昨日のアレ、一体なんだったんだろうな!？」

俺が自分の机にバッグをかけた瞬間に、友人が話しかけてきた。

こいつは秋瀬燦汰。あきせ さんた

12月後半に大活躍してそうだがクリスマスは予定はナシ、とのことだ。

「アレ……?……ごめん、思い当たる節がない」

「ハア?昨日の“音”だよ!ホラ!夜中にすっげー爆音みたいな  
のしたじゃん!!」

「……?」

首をかしげる。一切思い当たらない。

「まさかお前……あの音で目が覚めなかったのか……?  
」

「まあ、多分そうだろうな」

秋瀬は2秒ほど口をあんぐりと開けていた。

「どんだけ深い眠りについてたんだよ……」

「さあな……で、その爆音つてのは?なにがあっただけだ?」

そう投げかけると、自信満々の笑みでこつちを睨んだ。

「ほんとはまあ、警察くらいしか知らないんだけどよ……なん

と!新聞部部长であるこの俺が情報入手してしまいました!!!」

「お前新聞部だったんだ……」

「今更?!？」

「まあいいけど。で、その情報つてのは?」

秋瀬はその後も『僕らの友情を切り裂く一言をサラッと流された・  
』とかぼやいてたが、気にしない気にしない。

「いいか……?聞いて驚け!なんと!この続きはCMの後we  
bで!!!」

いらつ。

「いいから話せよ友達やめるぞ」

「ゴメンナサイ」



「で、え〜・・・、犯人が捕まる、もしくは、事件がしばらく起  
こらなかつたら、また学校再開だからなー。お前らももう受験生だ。  
決して気は抜かないようになー」

俺は窓の外を眺める。

・・・。

まあ、これくらいの刺激はあってもいいよな・・・？

こんな事めつたに起こらないぜ。

なにせこの世界は平和すぎる。

たまにはこんなスリルがあってもいいと思う。

ま、どちらにせよ俺たちの人生なんてずっと普通の

ドゴオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ

ン・・・・・・・・！！！！！！

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・？

一瞬、本当になにが起こったかわからなかった。

人間の脳の処理能力はすごいものだ。

たかが0.5秒ほどで、理解できた。

窓の外、少し離れた中等部校舎で

大爆発が起きていた。

きつとこの日から何もかもが狂っていったんだ。

俺たちの日常も、この世界も。





分かる。

次に爆破されたのは1 - B、2 - B、3 - Bだ。

「……っ！生徒全員外へ避難しろ！！」

教師が叫ぶ。

この状況で全員冷静に逃げられるわけがない。

生徒たちは我よ我よと廊下へ走る。

俺は他の生徒たちに押されてなかなか外にでられない。

ドオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ

オオオオオオオオン！！！！

やばいッ！次はC組だ！！

爆風に廊下に出ていた生徒たちは押し倒される。

このままじゃ全員逃げ切れない……！？

人の群れは立ち上がり、階段へと走る。

各クラスの爆破には3分近くの空きがあった。

クラスメイトたちは大体出ていき、ようやく俺も教室外へでられ  
そうだ。

しかしこのまま逃げるとD組爆破の巻き添えになるので、ここは  
冷静にD組爆破を待つ。

クラスには数人しか残っていない。

この数人は賢いのか、むやみに室外へ出ようとする者はいない。

その“数人”のなかには、幼馴染の雛姫もいた。

しかし雛姫だけは様子がおかしい。

地面にペタンと座り込んでいる。

「……どうした！？」

「う……うう……、足……くじいたかも……」

思考回路が一瞬吹っ飛ぶ。

じゃあどうやってここから逃げる。

置いていくか？

見捨てるか？

無視するか？

「……どうしても、『おぶって一緒に逃げる』という選択肢が出てこない。

人間って……弱い生き物だな……。

「ヒナっ！大丈夫!？」

雛姫の親友の月島つきしま夜見よみが雛姫のもとへ駆け寄る。

「え……あはは……、足くじいちゃった……。」

「あはは……って……。」

月島も動揺していた。

多分、月島も見捨てる選択肢しかないだろう……。

俺と同じ、ふつうの人間なんだから。

「……わかった！わたしの背中につかまって……！」  
「……は？」

何言っただよこいつ……。

「だめだよ……夜見ちゃん……が逃げ遅れちゃう……！」

「！」

「大丈夫だよ！なんとかなるって……!!」

「ならないよ！」

そんな会話を聞いてたら。

なんか俺ってみつともないな……。

と、そう思えてきた。

自分の事ばかり考えて、他人を引きずり下ろしてでも自分だけ助かろうなんて……。

人間としてはそれで普通なんだろうけど。

俺も一度くらい、子供の頃憧れてた“ヒーロー”ってやつに、なってみたかった。

「雛姫……！俺の背中に乗れ!!」



## 少年はヒーローになる（後書き）

いまだにSFっぽさが出ていませんが、しばらくすると出てくると思います。

## 踏み入れた少年

俺は雛姫を背に乗せ、廊下へ飛び出る。

案の定、3階は全体的に火の海だ。

クソッ！ 時代遅れの木造校舎め！！ なにが『おもむき趣ある校風』だ

よ！ 恨むぜ理事長！

転ばないように慎重かつスピーディーに階段をかけ降りる。

途中でコケそうになったが、なんとか持ち直した。

「……………っ!？」

3階と2階の踊り場を曲がると、熱で顔が溶けそうになる。

「チイツ……………、ここも火の海かよ……………」

2階には火の手が上がっていた。

「みーくん……………。大丈夫……………?」

心配そうな目で見つめる雛姫。

「どーすんだよ……………コレ……………。そしてみーくんはやめろ

っ……………!」

「下がってて!!!」

俺が立ち止まっていると、後ろからの月島の声。思わず振り向く。

月島はどこからか消火器を持ってきていた。

「ナイスだぜ月島!!!」

「ご褒美は弾んでくれよっ!!!」

そう言つと月島は炎の壁に突っ込み、一気に消火。

こういつときの手際はとてもいい。

「ほらっ、急げ! 時間がない!」

「あ、ああ……………」

一気に2階へ降りる。

階段のコーナーを曲がったときに、違和感。

「月島……………これは、マズイかもしれない」

消火器を投げ捨てた月島は、なんで?、と問う。

「俺の気のせいじゃなければよ．．．階段まで燃えてるんだ．．．」

「え．．．．．？」

「残り時間は！？」

月島はポケットから携帯電話を取り出し、時刻を確認した。

「．．．つて、時刻確認しても意味ないし！！」

こんな時にボケられても困る。

「ん．．．あと2分くらいだと．．．．．」

「くっ．．．．．」

これは本当にまずい。

消火器ももうないだろう。

何か火を消せるもの。何か火を消せるもの．．．．．

うん。

無いな。

諦めるのは嫌だが、もう打つ手がない。

階段へ逃げようにも、3階からも火で上にも下にも行けない。

このままだとE組爆破に巻き込まれるだけだ．．．．

どうするよ俺。

困った俺は月島の方を見る。

俺って、本当に弱いんだな．．．。

月島は下唇を噛み締めてうつむいていた。

「夜見ちゃん．．．？」

月島は深く何かを考えるようにして、そして何かを決心したかのように顔を上げる。

「二人とも．．．目．．．閉じてて．．．」

「．．．．？」

なにが起こるかはわからないが目を閉じる。

目を閉じると、温度だけが伝わってきてさらなる恐怖だ。

俺は恐怖心に耐え切れず、うつすらと目を開ける。

そこに信じられない物、触れてはいけない物があるとも知らず、目を開けた。

月島の左の手のひらには、魔方陣に似た光が集まっていた。薄く光る陣に、月島は右手を入れる。

入れた先には月島の手はない。あの陣はどこへ繋がってるんだ？月島が右手を引き抜くと、そこには消火器が握られていた。

(なん・・・なんだよコレ・・・どうなってんだ・・・?)  
月島は同じ動作を何度か繰り返す。

そして消化器を5本ほど取り出すと、こちらを向いた。とっさに目を閉じる俺。

「目・・・開けていいよ」

もう一度目を開く。

夢じゃない。

たしかにそこには消化器が5本、転がっていた。

「これ・・・どうやって・・・?」

「そんなことどうでもいいだろ?」

そう言いながら月島は淡々と消火作業をする。

どうでもいいって・・・、かなり良くない気がするが。

「まあとりあえず道は開けたから、はやく逃げよう」

月島はそう言い、走り去った。

「・・・・・・・・・・。俺も急ごう・・・」

無事校舎から出られた。

「ゼエ……はあ………ごほっげほっ……！死ぬかと思  
った……！」

実際死にかけてたしな。

「君たち……大丈夫かい……！？  
消防の人が話しかけてくる。」

これが大丈夫に見えるのかよ……。

「だいっ……じょーぶで……す………  
それでも正直には言えない俺だった。」

「それでもよ……E組は爆破されないな……」  
「そーだね……」

もう脱出してから5分近く経っている。  
なぜ、爆破されなかったのだろうか……？

しばらくすると、校長が自宅退避を言い渡した。

みんな複雑な表情で帰路につく。

中には避難しきれなかったA組の全員とB組、C組の数名の名前を叫ぶ者もいた。

「……雛姫。俺たちも帰るか……」

「……うん」

徒歩で駅へ向かう。

歩く先には、なぜか月島がこっちを向いていた。

人ごみにまぎれていたせいか、雛姫はその姿に気づかない。

歩を進めるうちに月島とすれ違う。

特に何も言わずにすれ違おうとした。

だが、月島はそうでもないらしい。

二人きりで話したい事がある。

そう、俺の耳元で囁いた。

咄嗟に振り向く。そこには歩き去っていく月島の姿が見えた。

「……っ！ すまん……先に一人で帰ってくれ……」

！

「うえ！？……どして……」

「忘れ物をしたっぽい！！」

そんな適当な言い訳でごまかすと、俺は月島のあとを追った。

少なくとも愛の告白でないことはたしかに分かっていた。

それがいい話じゃないことだって、きつとわかってたはずだ。

それでも俺は追いかけた。

きつとその先に俺の求めていた非日常が訪れるのではないかと、

期待してたから。

迂闊にも

、踏み入れてしまったのだ。

## 踏み入れた少年（後書き）

やっと超能力っぽい場面を見せられました。  
なんか楽しくなってきた・・・！

その少女、七瀬 愛理

「・・・見たでしょ」

俺は月島について行き、小さい路地に着くなりそう聞かれた。

「見・・・た・・・、って？・・・何を？」

なんとなく予想はついたが、全力でシラを切ります。

ハイ。

なんか、本当に惨めだな俺・・・。

「水城だつて、大体予想はついてるんだろー？ 私がなんのこと

話してるか、さ」

「・・・いや、さつぱり」

意地でもシラを切る。切って切って切りとおしてやる。

「チツ・・・。話にならん・・・。」

イジけた風に舌打ちすると、月島は後ろを向いた。

「・・・なあ、なんなんだよ一体。その“見た”ってのは・・・」

シラを切りながらあわよくば聞き出してやるう、という魂胆である。

しかしその質問をすると睨まれた。

月島は小さくため息。

そしてまた睨む。

ダンッ！！！！

「・・・つつ・・・。」

月島は、俺のネクタイを鷲掴みにして俺の背中を壁に押し当てるように顔を近づける。

「じゃあ質問を変える。水城は私が“目を開けるな”と言ったとき、目を開けたか？」

・・・。

その質問は卑怯だろ・・・。

雛姫は呼ばれず、俺は呼ばれた。

つまりこいつには、バレてる。

さすがに逃げ切れんか……。

「…………ごめん。開け

」

「それ以上の暴行はやめてください」

突然知らない女の子が割り込んできた。

しかしこの子、どこかで見たことが……。

いや、深く印象に残ってる。

「水城<sup>みずしろ</sup>、この子友達？」

「いや、知らない子だけど……。」

「ふむ……。」

乱入したその子は、ネクタイをつかんだ月島の腕をしつかりと掴んでいる。

おまけに、金髪である。

今朝見た子だ。

「それ以上の一般人への暴力は、光星学園中等部風紀委員長であるこの私が許しません」

「中等部……ねえ。どーりで身長が低いわけで……。」

「平和秩序を乱す者に年齢も身長も関係ないです。それにあなただつて、大して変わらないじゃないですか」

皮肉った月島の言葉を軽くあしらうその子は、とてもかっこよかった。

「まあそうだけど……。悪いけど私はこのお兄さんにちょっと用があるだけなんだよー」

「私にはただの尋問にしか見えませんが……？」

「よかつたね。拷問じゃなくて」

「茶化さないでください」

ここまで来ると、さすがに月島も少し困った表情。

それでも俺のネクタイは離そうとはしないのな……。

「とにかく、それ以上の暴力行為は許しませんからね……」  
その子は1度まばたきをすると、月島をしつかりと見て、続ける。

「SHIFT 1超能力者、月島 夜見さん」

その一言、月島の全身に悪感おかんが走る。

ネクタイをキツく締めていた腕が、するりと解け落ちる。

「ははは……、参ったな……。……君、何者？」

月島の手を離れたその子は、指を口元に添え、考えるような仕草をし、答える。

「光星学園中等部風紀委員、七瀬ななせ 愛理あいりと申します」

その子はさっきまでとは裏腹に可愛らしく、そう言った。

その少女、七瀬 愛理（後書き）

とうとうパツキン登場です。

でも実際日本に金髪の中学生なんているんですかね？

そもそも中学に風紀委員なんてありましたっけ？

## 始まり

「 つ。超能力者つてのは正解。でもさ、SHIFT  
1つてなんのこと？」

「それにはお答えしかねます」

「……………」

超能力者…………。

まさかそんな…………。

心の整理がうまくできない。

そんなもの信じられるかよ。

でも俺は実際見ている。

でもあれは、どちらかと言うと魔法に近かった気もする。

にらみ合つ月島と七瀬さん。

「なあ、超能力つて一体なんなんだよ……………」

俺はその質問を月島にしたのか、それとも七瀬さんにしたのかはわからない。

質問に答えたのは七瀬さんだった。

「さっきの会話を聞く限り、あなたも当事者の一人でしょう。中途半端に知って言いふらされるのも面倒ですので、その質問にはお答えします」

前置きが長いな。

「超能力とは…………、そのままの意味です……………」

前置きの割に本文は短いのな。

「そーじゃなくつて、もっと、こう、なんとというか……………」

「言いたいことは分かります。しかし私たちだつてよくわからないんです」

と、七瀬さんが言うつと。

「その割にはなんか色々知つてそんな事言つてたけどなー」

と、月島が皮肉たっぷり返す。

「少なくともあなたよりは知ってます。よく知りませぬこんな例<sup>レギュラー</sup>外項目を扱うわけにもいきませんので」

なんだよこの皮肉合戦。

「まあ、こんなところであなたと言い争っている暇はありません」

「私たちが暇人だつて言いたいのか？」

「『私たちが』つて……俺も入つてんのかよ……」

「いえ、私には今回の件についての調査がありますので」

今回の件……？

学校爆破の件か。

「この事件について、現在警察が調査を進めています。しかしどうもおかしな点があるんですよ」

「おかしな点……とは？」

「爆発物が、見つかつてないんですよ。どの教室でも。もちろん、爆破される予定だったE組でも」

……？

「つまり、それが超能力者の仕業つてわけ？」

「ご明察です。あなた方にはそれに協力していただきたい。」

はあ……？

「『あなた方』つて……俺も入つてんのかよ……」

「当然です。あなただつて、関係者でしょう？相手は超能力者です。ので、あまり無茶な協力はさせません」

「なあ、その、『あなた』つていう呼び方をやめてくれないか？

七瀬さん」

そう頼むと、七瀬さんは透き通った瞳で俺の顔をじっとみつめる。

「それでは、水城御鷹さん。それと、年上に『さん』を付けられると気持ち悪いので呼び捨てでいいです」

フルネームかよ……。

てか、気持ち悪いつて……。

気にはなつたがそれ以上はあえて何も言わなかった。



## 今日の災難、明日の寢床

翌日。

「えー……。というわけで、ただいまより第一回犯人だーれだ議論大会始めたいと思いまーす。はい拍手ー」

パチパチパチ。

七瀬はご丁寧小さく拍手をした。月島は言うまでもなくノーアクション。

空気は読まないタイプなんだろう。

「月島、拍手」

「しない!」

「ノリ悪いなー……」

キツと睨む月島。

これ以上言々と俺の顔を挟んで拍手されそうなので、よしておこう。

「ああ、拍手なんて別にいくらやってあげてもいいんだよ?でも

ね……、」

「もったいぶるなよ。言いたいことは言っていていいぞ」

「じゃあ言わせてもらう。なんでこの会議私ん家で始まったの

!?!」

「……」

七瀬と俺は沈黙し、月島の顔を眺める。

「俺だつて別にここでやりたかった訳じゃない」

「私がお願いしたんですよ」

七瀬はそう切り出した。

「男性の家に上がるのはどうかと……。私も風紀委員ですので

「一応」

「ぬ……。じゃあナナセさんのお宅でやればよかったじゃないですかよー……………」

なんか変な口調になってる。

「あなた方を家に入れると危険な気がしたので」

「あなた方って……………俺も入ってんのかよ」

「それはどういう意味だよー。荒らしたりしないよ?」

そうですね。なら、今後は検討します。

七瀬はそう言うと、携帯電話を取り出してカチャカチャとつつく。会話の途中でも平気で携帯、というのはやはり七瀬も現代人なんだな……………と悟る。

携帯電話を持ってきたバッグにしまうと、急に立ち上がった。そして拳動不審にあたりを見回す。

「どうしたの?」

月島が尋ねると。

「家宅搜索です」

七瀬がスパッと答えた。

「なんで!? されるのは嫌だって言ったクセにするのはいいの!」

「まずは味方の潔白を証明しないと捜査は進みませんよ」

「そのセリフ、ワクワクしながら言う言葉だっけ!?」

七瀬はとても楽しそうな顔で部屋をキョロキョロと見た。

その後もどつたんばったんと楽しそうにはしゃいでいたが、そろそろ止めないと危ない。

「お前ら落ち着けよ……………家の方に迷惑かかるだろ……………」

「……………? そう言えば、この家には私たち以外の人の気配がしませんか」

「お前気配とか読めんの!? かつけー!」

「言葉の綾あやですよ」

俺たちは俺たちで騒いでいるが、月島1人ボーっと座っていた。

まるで別の考え事をしてるみたいに。

「……どうした月島？」

「うえ？ああ……いや、なんでも」

「……？」

そう言い、手を横に振る月島の顔は今にも泣きそうだった。

その理由なんて俺には分からない。

しかしここで理由を訊くのは野暮ってもんだ。

さらっと流すのが粹ってもんだらう。

「で、そう言って手を横に振る月島先輩はなんでそんなに今にも泣きそうな顔をしているんですか？」

野暮な奴はここにいた。

「オイ……七」

七瀬の無礼を咎めようと発した言葉はすぐに遮られた。

「私、いないんだよ……、両親」

月島はうつむいて、そう答えた。切ない顔で。

俺は七瀬の方を、半分睨むように、見る。

その顔は『無』だった。

特に何も思ってないような、そんな顔。

「私には弟も居るんだけど……、病気で、ずっと病院」

小さな声でそう言った。

「そうか……」

どうすんだよこの空気……。

『犯人だーれだ』とか言うような空気じゃない。

シリアスなんだよ。

俺の家にも父親はいないけど、母親と弟がいる。

死んでないどころか弟に至ってはずっと部屋の中にいる。

だから寂しくない。きっと。

「……」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」  
「・・・・・・・・・・・・・・・・」

誰も喋らない。

帰りたい・・・・・・・・。

本当にどうすんだよこの空気・・・。

ここで『元気に仕切り直そう!!』とか言う奴がいたらそいつは間違いなく空気が読めない。

「そうですね。それは気の毒ですね。それでは、元気に仕切り直しましょう」

空気が読めない奴は、ここにいた。

予想通りの七瀬愛理である。

だがこれ以上空気が悪くなるのも困るので、便乗しておこう。

「そうだな。でも、犯人を見つけ手掛かりなんてあるのか?」

「ありません。あるんならとくに私一人でやってます」

「じゃあどうやって探すんだよー」

月島もようやく喋った。元気で何よりだ。

「わかりません。なので今日はお開きです」

「なんで集まったんだよ!?!」

まあ、もう夕方なので仕方ない。

そろそろ帰らないと母さんが仕事から帰ってくる時間だ。

「それでは各自、犯人を探す方法を考えておいてください」

「お前結構無茶な性格だなー・・・」

「はい」

というわけで。

というか、どういうわけか本日はお開きとなった。

「おじゃましましたー」

「おじゃましました」

俺と、それから空気を読まない野暮な七瀬は月島（の家）に挨拶をすると、玄関を出た。

特に交わす言葉もなく5歩ほど歩く。

「あ、水城御鷹先輩。ちよつとここで待っていてください」

「フルネームはやめてくれ」

そんな俺の切実な願いも聞き入れず、七瀬は月島の家に戻る。

忘れ物か・・・？

しかし、七瀬は玄関に入ると、扉がゆっくりと閉まった瞬間に出た。来た。

「お待ちせしました」

「忘れ物か？」

「いいえ、ちよつとしたイタズラを・・・」

意味ありげに微笑む。その“ちよつと”がどれくらいのものなのか。

うむ。こいつのやりたいことはさっぱり分からん。

「まあいいです。帰りましょう」

そう言い七瀬は俺の腕を引っ張る。

「帰りましょうって、お前ん家こつちなのか？」

七瀬は黙り込む。

急に俺の腕から手を離すと、俺の方を真正面から見て、言った。

「違いますよ。護衛です。いつ爆破が起こるか分からないんです

よ？」

そして、くるつと方向転換。俺の家がある方に向き、勝手に歩き始める。

「まあ、もう手遅れかも知れませんがね・・・？」

「お前が言うつと冗談に聞こえねー・・・」

本当に呆れたものだ。

俺は歩く七瀬の背中を追った。

冗談じゃない。

本当に、冗談じゃない。

俺はもっと用心しておくべきだったんだろうか。

いや、用心してどうにかなる問題でもなかった気がする。  
俺は頭の中がぐちゃぐちゃに掻き回されるような感覚に陥る。  
これを現実だと認識してしまうと何もかもが潰れてしまいそうで  
「あーあ。これは派手にやっちゃいましたねー・・・」  
隣の七瀬がまたも空気を読まずに喋りかける。  
空気が読めないとか以前に、不謹慎が過ぎる。  
現状を簡単に説明しよう。

俺の家が、燃えていた。

窓という窓からは黒い煙が空へと放たれ、距離を置いても顔がと  
ても熱い。

「なん・・・で・・・？」

誰に投げかけたのかも分からない質問に、七瀬は答える。

「爆破に巻き込まれたんでしょうね。お気の毒に」

少々カチンとくる言い方だったが、俺はそれどころじゃなかった。

俺はただただ、消防士たちが火を消すのを遠くから見ていること  
しかできなかった。

「　　ッ！そうだ、秋雨あきは！？　ちゃんと逃げたのかよ！？」

「引きこもりの弟さんなら、私が逃がしましたよ。さっき。メー  
ルで」

「・・・ハア？　お前、なんであいつのこと知ってんだ？」

七瀬はそれでも、冷静に燃え盛る俺の家を見つめる。

「一応、クラスメイトですから」

七瀬は、単調に、淡々と、そう答えた。



## 今日の災難、明日の寢床（後書き）

今回は思いつきで主人公の家を燃やしました。

これが今後の展開に吉とでるか蛇が出るか・・・。

まあ、何もわからないって意味です。

今更ですが、感想や誤字・脱字などあればよろしくお願いします！

## そして俺は事実を知る

俺は寢床に困ったのでクラスで一番親しい友人、秋瀬燦汰あきせ さんたの家で泊まらせてもらうことになった。

「お前も大変だなー・・・1週間で2度もあんな目にあうなんてよー」

リビングテーブルのソファに座る俺に、真正面に座る秋瀬は言った。

「まるで何者かに狙われてるみたいですねー」

と、なぜか俺の横には秋瀬の姉、秋瀬 まどかさん

ふつうこういう時って俺の正面側に座らないか？ なんて横・・・

秋瀬のお姉さんは物腰の柔らかい人で、長い髪の毛を後ろで縛っているところに生活感を感じる。

この人がまさか、秋瀬（燦汰のほう）と同じ両親から生まれたとは信じがたい。

対する秋瀬のほうは、騒ぐ 怒られる 喋り始める 騒ぐ 怒られる、をひたすら繰り返すような単細胞なのである。

「はは・・・。そうですね・・・。」

無理やり笑みを作り、そう答える。

「で、それはいいけどよ・・・。結局その弟はどうなったんだ？ なくなったんだろ？」

「ああ。事件の後にはもう居なくなってた」

「見つかったらいつでも匿かくまってやるからな」

「ああ、うん。ありがとう・・・。」

俺は、差し出されたオレンジジュース（らしきもの）をグイッと飲む。しかしオレンジジュースにしては少しトロツとした舌触りがある。

「これ、なんのジュースですか？」

「見てのとおりオレンジジュースだろ？」

「お前に訊いてねえよ……。お前に訊いたんだったら敬語なんか使わん」

俺はまどかさんに訊いたつもりだった。

まどかさんはおっとりとしている。

「あの、まどかさん……」

まどかさんは、おっとりとしている。

「まどかさん……聞いてますか？」

まどかさんは、おっとりとして（以下略

「姉貴。聞いてるか？」

秋瀬はまどかさんの肩を軽く揺さぶる。

「ん？あら、ごめんなさい。なんの話をしてたんだっけ？」

「いや、これ、何のジュースですかーって……」

「あら、美味しくなかつたですか？」

「いや、おいしかったです。はい」

「そのオレンジジュースは隠し味にハチミツとハチノコとプロテインをいれたんですよ」

「なるほど、どおりでドロツとザラツとして……プロテイン！？」

なんで客人に出すジュースにプロテインが！？

俺にどうなって欲しいんだ！？

「あ……あの……、なぜプロテインが……」

「え？男の子ってみんなプロテイン好きじゃないの？」

「あつ、姉貴！俺と他の奴を一緒にしないでくれ！！」

「お前日常的にプロテインを摂取してたの！？」

「へへっ。昔の話だ……」

照れくさそうに言うな。てかお前そんなに筋肉ないだろ。

「お前、プロテイン飲んだからって筋肉ムキムキになるわけじゃないぞ」

「そ、そうなのっ！？」

予想通り、案の定の反応だ。

にしても、変な家族だよ。コイツら。こんな綺麗な姉だけでも分けて欲しい。

「そういや、まどかさんってもう大学生ですよ？なんでここに？」

俺たちが高校3年だから、その姉はもう大学生のはずだ。

ひよつとすればもう社会人に出ているのかもしれないが、まどかさんはかなり若く見える。

むしろ高校生にすら見える。

「ちよつとこちらに用事があつて・・・それで」

「そつすか・・・」

特に気になつたわけでもないが、なんとなく質問しただけだった。なんか気まずいな・・・。

こんな仲のいい姉弟の中に混じるなんて・・・。

誰かこの空気をかき乱してくれー！！

ピンポーン

チャイムの音がした。

音の近さからして、この家だ。

「誰でしょう・・・？」

まどかさんが部屋から出ていき、見事に募っていた緊張感から開放される。

た、助かった・・・。

「お前のねーちゃん、美人だな・・・」

「あー、昔からモテたもんな・・・」

「まどかさんて、うちの高校だったっけ？」

「そっだぜ」

秋瀬とは高3になってから知り合つたので、姉のことは知らない。秋瀬自身の口からも聞いたことはなかった。

しばらくすると、玄関の方からパタパタとスリッパの音が近づく。リビングの扉が開くと、顔をだしたのはまどかさん。当然か……。

「誰だったのねーちゃん？」

「女の子。水城君に用事だつて」

お、俺？

「なんだろな……八八……」

大方、月島か七瀬あたりだと思いが……。

的中。

ドアの前にいたのは、月島だった。

「何の用だよ……」

月島の顔はいささか不機嫌そうだ。

「いや、昨日さ、私ん家から帰るとき、なんかした？」

「あ？いやなんも……。どうしたんだ……？」

そうだ、確か帰りに七瀬がイタズラしたとか言ってたような……。

「家のブレーカーが……、全部落ちた……」

……。

「……。陰湿な嫌がらせだなー……」

「部屋に戻ったら電気が消えててさー、で、そんなに電気使つてなかったからブレーカーでもないかなーと思つて見てみたら、案の定ブレーカーだったよ……」

「大変だな……」

「で、水城の家に行つてみたら……、なんか焼け焦げてたしさー……。おまけに七瀬の家はわかんないしさー、とにかく大変だったわけよ」

……。

「なんつーか、災難だな・・・」

「てわけで七瀬に会ったら叱っておいてくれよー」

俺はあいつの保護者かよ。

「わかったよ・・・」

「じゃ、用はそれだけだから」

月島はおとなしく帰った。

「・・・・・・・・・・・・・・・・。なんだったんだよ・・・・・・・・一体・・・」

ドアがゆっくりと締まるのを見届けると、俺はリビングに戻

ピンポーン

れなかった。

「今度はなんだよッ・・・・・・・・!!」

他人の家だということもすっかり忘れ、ドアをガチャリと開ける。

「こんにちは水城御鷹先輩」

そこに立っていたのは、七瀬だった。

「何の用だ・・・・・・・・?」

「昨日、月島先輩の家のブレイカーを全部落とした件について謝罪しようと思ったので、月島先輩に会ったら謝っておいてください」

「なんでお前ら俺に押し付けようとするんだよ!!七瀬は月島の家知ってるだろうが!!」

「ワカリマセー（棒読み）」

クソッ。『かつこぼうよみ』まで律儀に読みやがって・・・。

「・・・・・・・・。冗談ですよ・・・。今日は別の用事で来たんです」

「・・・・・・・・なんだよ?」

「なんと」

七瀬は無駄に余韻をあける。

「犯人を特定しました」

「ボケてる場合じゃなかったよね！？そっちが大本命だよ！！」  
なんか驚く場所が違う気もするが……、まあいつか！

「で、誰なんだよ……その犯人つてのは……！」

「先輩のよく知ってる人物ですよ……」

……？

よく知ってる人物、と言われてもパツと浮かばない。

「で！？誰なんだよ！！??」

「……それはあえて焦らします。まずは犯人の超能力についてです」

焦らしやがった！？

焦らしやがったよコイツ！！

「超能力とかもうぶつちやけどうでもいいよ！犯人教える！！」

「どんな名探偵だって、犯人より先に犯行方法について先に語るでしょ？」

名探偵気取りだよコイツ！！

「犯人の能力は、人工的な明かりを爆発させる能力」です」

「……超能力ってそんな大雑把なもんでいいのかよ……」

「だから犯人は大きな施設を集中的に狙った」

俺の率直な疑問を華麗にスルーしやがった七瀬は、名推理を披露し始めた。

「しかしその中には例外が二つありました。それがなんだか分かります？」

「1つは……、俺の家だよな……？」

「正解です。そしてもう一つが、月島先輩の家なんですよ」  
何言つてんだよコイツ……。意味わからん。

「……ッ？はあ？爆破されてないじゃないか……」

「そうですね。されませんでした。私がブレーカーを全部落とすことによって、ね」

なるほど……。それならブレーカー事件と犯人の超能力にも辻褄があうな……。

「その“例外”の共通点。それは」

「……。俺がいた場所、つてわけか……。」

「正解です」

七瀬はおどけたように、手を鉄砲の形にして俺を撃つジエスチャイをした。

「……。でもよ、それだとこの家も爆破されておかしくないんじゃないか？」

「ええ……。犯人も、自分のアジトは壊したくないでしょうね」

自分の……。アジト？

自分の家ってことか？

「え……。それってつまり、犯人は……。」

「その通りです。犯人は、先程からあなたの後ろにいる、秋瀬先輩ですよ」

え……？

後ろ……？

後ろを振り返る。

全身にゾクツと悪寒が走る。

そこには、気持悪い笑みを浮かべた、秋瀬 燦汰がいた。

そして俺は事実を知る（後書き）

意外性を追求しました。  
ただそれだけです！！

## 愛理の素顔

ジジ、ジ……ジ……ジ……

玄関の蛍光灯がパチパチと点滅する。

まずいッ！

逃げようと家の外に体を捻る。

しかし、段差のせいでバランスを崩した……！

ヤバッ……死ッ

ぐいつ。

全身の重力が狂ったように、引っ張られた。

「ぐえっ……」

そんな間抜けな声を上げながら俺の全身は家の外へ放り出される。

その瞬間

ドオン！！！！

玄関口が真っ赤に染まり、熱が露出した肌を覆う。季節のおかげもあってか、肌の露出は少ない。

煙が晴れ、家の中が見渡せるようになると、秋瀬は軽い舌打ちをかました。

まるで、俺が死ねばよかったと言わんばかりに。

俺は秋瀬のその表情に、リアルな恐怖心と激昂感が込み上げる。

信じてたのに！！

友達だって……裏切らないって……信じてたのに！

「ダメだよなア……水城オ？人間てさ、妙な力を持つちまうと妙にそれを使いたくなっちまう。まるでお年玉をもらったガキみてえによオ……」

秋瀬はフラフラとこっちに向かって歩いてくる。

「それは制御しきれないあなたの責任です。あなたはその超能力ちからに溺れ、無闇に足掻いているだけです」

凜々しく説教した七瀬は、向かってくる秋瀬に動じず、ただ見据える。

「七瀬、ここは逃げたほうが・・・」

「彼の能力は室外ではただの飾りです」

それもそうだった。

えと・・・、『人工的な明かりを爆破させる能力』だっけか？

人工的な明かりは昼間の室外にはほとんどない。あいつの能力は室外では無意味なのだ。

「ハハッ・・・じゃあ余裕だなッ」

「いや、案外そうでもないんですよ・・・」

「!？」

よく見ると、秋瀬の手には包丁たるものがしっかりと握られている。

「なアにコソコソしてんだよ・・・。逃げなくていいのかア・・・？」

「SHIFFT-1如きに遅れをとる私ではありませんので」

キッパリと。キッパリと宣言した。

自信満々だなー・・・。

「先輩は逃げてください。邪魔になるので」

自力で立ち上がる俺に対して、七瀬は辛辣な言葉を浴びせる。

「邪魔って・・・、そんな言い方ッ」

ヒュン

秋瀬は包丁を横に薙ないだ。

標的は七瀬だ。

驚いたことに七瀬は、不意打ちにも近い一撃をあっさりとかわしてしまったのだ。

あっさりと。眉一つ動かさず。

「チツ・・・!!」

秋瀬はその七瀬の行動を偶然であると断定し、包丁を手前に引き、次は突く。

俺の脳内では、七瀬が避ける、という考えしかなかった。  
七瀬にはそれをするだけのスキルがある。

どういう原理かは知らないが、七瀬にはその速度の世界が許されている。

俺の予想は、完全に外された。

ブチッ

何かが干切た。

それが、秋瀬の腕である事は誰がどう見ても一目瞭然。

俺の目の前には、秋瀬の右手が包丁ごとゴロリと落ちた。

「…………ツ?!ぐツツ……………、ンだよこれエ!?!?!」

秋瀬は今までに見たことがない、“自分の腕が無い”状況に戸惑うばかりで、反撃の手を打とうとはしなかった。

「これで力の差がお分かりですか?」

七瀬は一切動いていない。

凶器を持った相手に対して、一切の同様を見せず、ノーモーションで反撃してみせた。

それが力の差。その力はあまりにも圧倒的。

「俺の…………俺の腕がツ……………!!う、ぐ、あアアああああ

ああああああああああ!!」

ぐちやり、と。生々しい音がした。

「ガボツ、ゲホッゴ……………ぐ……………」

秋瀬は何の前触れも無く吐血した。

さっきの音からして、舌を噛みきったのだろう。

でも、なんで?

30秒ほどすると、秋瀬は息絶え、無様に地面に転がった。

七瀬は返り血を一切浴びていなかった。

でも、どうやって秋瀬の腕を切断したんだろう……………。

その切断方法が、“今までこの世界にあつた技術”ではないことは確かだ。

「水城ツッ！一体どうし……て、ええ！？ナニコレ?!」

「っ……あ、月島……」

爆破騒動に駆けつけた月島は、この状況を見て驚愕した。

「……秋瀬？なんで秋瀬……が……」

説明なんて出来る訳がない。当事者の俺ですらこの状況を掴みきれないんだから……。

「あれ？月島先輩……、いたんですか？」

こちらを振り返る七瀬の表情は、とても魅力的……とは言いがたい、まるで小悪魔のような冷笑だった。

「フフ……。水城御鷹先輩、月島先輩。それでは引き続き真犯人の特定でも始めましょうか」

は……？

今なんて？

「真犯人って……秋瀬じゃなかったのか？」

「ええ。秋瀬さんは真犯人の能力で操られていました。だから舌を噛んだんですよ。戦えない下部に意味はありません」

……。

目の前で人が死んでるっていうのにツ……、なんで淡々と喋り続けることができるんだよ……。

「お前……、死んだ人間が怖くないのか……」

「いいや、怖いですよ。でも怖がつている暇はないんですよ……」

・そんなことより、何かおかしいと思いませんか？」

「な、何が……？」

「たしか秋瀬先輩って、お姉さんがいますよね。それも家の中に……」

なんでコイツが知ってるんだよ……。

「名探偵さんはなんでもお見通しだな……」

「それほど……」

・・・。

「で？そのお姉さんがなんだって言うんだよ・・・？」

「まだ気づかないんですか？これだけ騒ぎが起きてるのに」

「あ・・・、」

「そうだ。」

こんなに騒ぎが起きているのに、まどかさんはちっとも来ない。

それどころか騒ぎもしない。

「なんででしょうねー。それは、お姉さんが真犯人だから・・・」  
「？」

## 愛理の素顔（後書き）

もうすぐ1章完結です。  
感想など頂ければ幸いです。

## ある一つの決着

どういう事だよ……。

まどかさんが超能力者で……、弟を使って犯罪を犯した……。  
？

「お、おい七

」

「ご明答よ？」

急な後ろからの声に、背筋がゾクツとする。

振り返るまでもない。

これは、秋瀬まどか本人の声だ。

振り返るとそこには、顔の上半分を覆い隠す灰色の仮面を付けた秋瀬まどかと、そしてもう1人の男が立っていた。

「クス……、頭がいいのねお嬢さん。お姉さん尊敬しちゃうわあ……。」

「一連の事件の真犯人ですね。秋瀬まどかさん」

七瀬は別段うれしそうでも悲しそうでもない顔で、名探偵さながらのセリフを吐いた。

まどかは仮面を外し、素顔を見せる。それは紛れも無く秋瀬まどかの顔だ。

「そうよ……。私が、ね。まあ私の能力自体大したものじゃないから、弟の能力を借りたんだけどもね」

なんて……。最低の人間。

この人を1秒でもいい人だと思った自分が恥ずかしい。まどかは静かにまた仮面を付け直す。

「この人、秋瀬のお姉さんなの？」

月島が小さく俺に耳打ちする。

「ああ、そうだ……。」

「妹がいるとは聞いてたけど……」

「妹もいるのか……」

正直、今居ない秋瀬妹のことなんて興味がない。

「それでは、あなたを拘束させていたのですが、よろしいでしょうか？」

「嫌だ。……って言ったら？」

「……、同じ結果です」

「怖い そんな正確だとモテないわよ……？」

「余計なお世話ですっ」

両者譲る気はないらしい。

この前の七瀬と月島を思い出すな……。

2人の会話を心配そうに見つめる俺と月島。

いや、心配なのはそっちじゃない。

まどかの後ろ、仮面をつけた男だ。

髪は真っ白く、この場面で唯一常軌を逸している。まあ、2人が付けた仮面も十分だが。

しかし微動だにせず、ただそこに存在しているだけの郵便ポスト並の存在感しか放っていない。

明らかに怪しい。

「まア、こつちも安安と捕まる訳にも行かないのよねエ……。  
アハッ」

まどかは、ニヤけた面で俺（仮面をつけているので曖昧）を見た。

ぐしゅッ

なんだ？

どうもさつきからみんなが俺に注目している。

七瀬と月島は驚愕し、まどかはニヤニヤと俺を見つめる。

あの白髪野郎は？

いない。

俺の体は無意識的に、地面に吸い寄せられる。  
さつきから何かがおかしい。

背中がじんわりと熱い。  
意識が遠のく。

体が地面にねじ伏せられてから、ようやく悟る。

俺は白髪仮面野郎に、背中を刺された。

長剣で、ブスリと。

背中からドクドクと血が湧き出る。

視界が揺らぐ。

背中に亀裂が走ったかのように痛みだした。

死に対する恐怖心すら感じた。

まだ死にたくない。まだ死ぬには早い筈だ。

いやだいやだ嫌だいやだいやだ嫌だ嫌だッ嫌だいやだ嫌だいやだ嫌だ嫌だいやだ嫌だアッ!!!

その願いは決して叶わず。

俺は土の感触すら感じなくなった。

そして意識は出ることのできない深い深い海の底へ……。

さあ、もう準備はできた。

いつでも出発は可能だ。

覚悟はある。

自信だって、ある。

もうこんなのは懲りごりだってんだ。

行こうぜ、俺。

行こうぜ、みずしろ しゅう水城秋雨ッ！！



## ある一つの決着（後書き）

主人公を後ろから刺してみました。

でもこれでお話は終わりじゃないですよ！

ここからは元主人公、御鷹の弟である秋雨のお話です。  
感想などございますようお願い申し上げます。

## 少女と部屋

「目標の水城御鷹を連れて参りました・・・」

そこは、お姫様が住んでいるようなメルヘンチックな部屋だった。すでに息の絶えかけた御鷹を抱え、白髪はくはつの仮面男が言う。

男と見つめる先にはお姫様ベッドに座る、1人の少女がいた。

「ご苦労ね・・・って、背中からブツスリじゃない・・・」

「生死は問わない」と申し遣っていたもので

言葉の綾より、と少女はイジけた風に男に近寄り、御鷹の顔をしげしげと見つめた。

「何よ・・・まだ死んでないじゃない」

「急所は外しましたので」

日本ではまだ殺人が犯罪だというのに、この男はあっさりと御鷹を殺そうとした。

厳密には殺していないのだが、十分な殺人未遂である。

「コレはどうしますか？」

「・・・運んどいて。研究室よ」

「かしこまりました。お姫様」

男はフツと笑うと、抱えた御鷹ごとどこかへ消えた。

少女の年齢はもう、17歳。

“姫様”と呼ばれるにはもう年齢が釣り合わない。

本人はやめるといつも言っているが、あの男はいつまで経ってもそれをやめようとはしない。

「まったく、性格の掴めない男ね」

そう言って少女は、地面に転がったナニかを軽く蹴飛ばした。

「この部屋、暗いわね・・・」

明かりの付いていない部屋が明るいわけもなく、ヤレヤレと少女は立ち上がる。

地面にゴロゴロと転がったものを払いのけながら、部屋の電気ス

イッチまで歩いた。

電気を付けると、突然の眩しさに少女は目を背ける。

「ったく・・・こんなこと私にさせないでよね・・・」

しばらくしてシャンデリアの光に慣れ、まばたきを3回ほどすると、少女は目を開けた。

部屋の床には、ゴロゴロと人間の死体が転がっていた。

部屋の壁は返り血塗れ。

そこにはメルヘンなど一切残らず、残ったのは蓄積された恐怖と少女の姿だけだった。

「はあ・・・処分が面倒ね・・・」

## 第1章：完結

## 少女と部屋（後書き）

第1章が完結いたしました。

全部で10章くらいになると思います・・・。

長いな・・・。

## 第1章登場人物紹介（前書き）

登場人物紹介です。

## 第1章登場人物紹介

### 第1章：登場人物紹介

水城 御鷹 (みずしろ：みたか)

一般戦闘力：30 (最高は100)  
特殊戦闘力：0 (最高は100)

主人公。というか、元主人公。  
何か特殊なスキルがあるわけでもなく、いたって平凡な男子高  
校生。

中学生の頃に少し剣道をかじったので、基本的な戦闘能力はあ  
る。  
趣味も特技もコレといってナシ。  
見ていておもしろくもなんともない人間だ。

水城 秋雨 (みずしろ：しゅう)

一般戦闘力：???  
特殊戦闘力：????

第2章からの主人公。

第1章では大して目立たなかったが、御鷹の弟である。  
現在中学3年生。

趣味は筋トレ、特技は武道ならなんでも。

七瀬 愛理 (ななせ：あいり)

一般戦闘力：80

特殊戦闘力：999 (測定不能) (SHIFT-?)

秋雨のクラスメイト。

金髪のおさげ。

戦闘能力においては、回避、防御能力に特化している。

未だに謎多き存在である。

学力においてもとても優秀。

月島 夜見 (つきしま：よみ)

一般戦闘力：18

特殊戦闘力：11 (SHIFT-1)

所有する超能力は「何もない空間から物体を取り出す能力（今までに見て触ったことのあるもののみ有効）」

未だに超能力について詳しく知らないが、使い方だけは知っている。

「くくかよー」や、「くくだろー」など、語尾を伸ばすクセがある。

身長は御鷹と比べてかなり低い。

クラスメートの神雛姫の親友である。

神 雛姫 (さかき：ひなき)

一般戦闘力：5

特殊戦闘力：0 (おそらく)

御鷹の幼馴染でクラスメート。  
同じくクラスメートの月島夜見の親友である。  
基本的に頭は悪く、成績はクラスで最下位レベル。  
後半はほとんど空気だが、果たしてまだ出番はあるのか・・・？

秋瀬 燦汰 (あきせ：さんた)

一般戦闘力：20

特殊戦闘力：15 (SHIFT-1)

『人工的な明かりを爆破させる能力』を所持している。

超能力者としてはかなり弱い部類だが、使い方によっては強い。  
その『強い』に至る前に死亡した。

ちなみに、能力をうまく活用するためには、懐中電灯を大量に  
持ち歩けばよかった。

秋瀬 まどか (あきせ：まどか)

一般戦闘力：40

特殊戦闘力：80 (SHIFT-3)

物腰のやわらかい秋瀬燦汰の姉。  
と思いきや、とてつもないDS。  
弟の燦汰を使って犯罪を犯し続けた。  
なぜ途中から仮面を被ったかは不明。

秋瀬 凜々 (あきせ：りり)

一般戦闘力：????

特殊戦闘力：????

秋瀬燦汰、秋瀬まどかの妹。  
まだ存在しか出てきていない。

白髪の男

(はくはつの…おとこ)

一般戦闘力：???

特殊戦闘力：???

見た感じの年齢は高校1年生くらい。

年齢に似合わず白髪である。

なぜ仮面を付けていたかは不明。

御鷹を殺そうとした張本人である。

それ以外の情報は一切不明。

少女 (しょうじょ)

一般戦闘力：???

特殊戦闘力：???

詳細は一切不明。

水城 春子 (みずしろ・はるこ)

一般戦闘力：40

特殊戦闘力：0 (おそらく)

御鷹と秋雨の母。

今後出番は無いと思われる。

水城 武雅 (みずしろ：たけまさ)

一般戦闘力：89

特殊戦闘力：0 (おそろく)

御鷹と秋雨の父。

物語開始時からすでに死んでいる。

剣道においては七段取得者。

八段を取る前に死んでしまったので、腕はかなりいい。  
死因は事故死。

のりちゃん先生 (のりちゃん先生)

一般戦闘力：38

特殊戦闘力：0 (おそろく)

光星学園高等部、三年E組の担任の教師。  
担当はこう見えて家庭科。



## ある街の路地裏にて

この世界は狂ってる。

ちよつと前まで気持ち悪いぐらいの平穏だったのに。

昔から、人間皆平等だとしつこいほど教わってきた。父からだ。

父は剣道の腕がとても達者で、職業においても会社ではとても優秀な人間だった、と聞いている。

今はすでに死んでいるので確かめようもない。

人間皆平等だ。努力を積み重ねた人間は上に昇り、その努力を怠った人間にはそれ相応の結果が残る。

父は俺にそう繰り返した。

だがこの世界は狂い始めた。

人間より少し秀でた存在、“超能力者”が現れたのだ。

まったく、世界は不平等だな。

何の努力もしてないのに、手から火の玉とか出せるんだぜ？

まあそんな超能力あるのかは知らんが。

実際俺は超能力者ではないので、どんな超能力があるのかは一切知らない。

聞いた話では、相当奇妙な能力らしい。

人工的な明かりを爆破させたりとか、物体を何も無い場所から取り出したりとか。

正直どうでもいい。

そんな能力を手に入れたところで、今更何が変わると？

能力を驕おこって犯罪に手を染めるか、能力に怯えて一切使わないか、それともその能力で人助けでもするか？

どうでもいい。どうでもいい。

まあ実際、俺はその超能力者の集団に囲まれているわけだが、能力を驕おこって犯罪に手を染めたバカどもだ。

「にーちゃんええ加減金出したほうがええで？おっさん達変な能力持つてるさかいなー」

「持ってません」

「持ってないってこつちやないやろ？さっきもなんか買い物してたやろ？」

「もう使い果たしました」

本当にめんどくさいな。この手の連中は。

優しく話しかけてくれるだけまだマシか。

ひどいヤツらだと言いつつナシでブン殴ってくるからウザイったらありやしない。

「おうなんじゃいボウズウ・・・、じゃあサイフ見してみんかい  
イ・・・」

ほんつつつつつと、めんどくせえなツ！！

カネが欲しいんならその気持ち悪い能力見せモンにして無様に金でも乞うてるって話だ！

「あ？無いつつつてんだろしつけえな・・・！」

俺のあからさまに喧嘩を売るような態度に、不良たちは頭に怒りのマークみたいなのが浮かぶ。

「あア！？ンだてめえブツ殺されてえのか！？」

「やれるもんならやってみるよ・・・」

「あ！？」

「やれるもんならやってみるつつつてんだよクズ！！」

コワモテのお兄さんを相手にここまでタンカを切ったのはいいが、正直この作戦は失敗だったな。

「てめえ・・・大人ア舐めてんじゃねえぞクソガキ！！！」

俺を取り囲んでいた男達の1人がキレて殴りかかってきた。

右拳を大きく振りかぶって、あの角度だとおそらく狙いは俺の顔面だ。

ケンカ慣れしてなさそうな不格好な殴り方。おそらく自分より強い奴に媚びてさんざん無駄な虚勢を張って生きてきたんだろう・・・

同情するよ。

でも残念ながらアンタのプライドは今からズタズタに引き裂かれるんだぜ？

社会人にもなつてヤンキーかましてたヤツが、今から中学生如きに気絶させられるんだよ。

まあ、やってるこつちからすれば愉快極まりないんだけど。

アンタ相当無様だぜ。

だんだん視界を覆い隠していく右拳を、俺は寸前で左側によける。ヤンキーの一人は何が何だか分からずに、拳を振り切る。

そして自分の拳が相手を捉えていなかったのに気づくと、慌てて右手を元に戻し、俺の姿を再びとらえようとした。

でももう遅い。

気づいたときにはもう地面に体をねじ伏せられていた。

起き上がるうとしても、起き上がれない。

誰かが抑えつけてるから？

いいや、違う。

それはアンタの脳が揺れてるからだぜ？

俺は地面に転がったヤンキーを冷たい目で軽くあしらうと、残りのヤツらが喚く様子を傍観する。

この中にどれだけ超能力者が混じっているのかは分からないが、まあ大したことはないだろう。

続いての暴漢は、あるうことが、懐からナイフを取り出した。

「兄ちゃん何モンや・・・？」

ただの中学生だよ、と答えようとしたが、相手は大して聞く気もないらしい。

今度は別の暴漢が後ろから脇を固めるようにして俺を拘束した。するとどうだろう。

ナイフを取り出した奴とはまた別の暴漢が俺を殴りにかかってきたではないか！

めんどくせ……。

肩を固定するのはいいが、腕まで固定出来ない。

俺はポケットから、さっき買ったナイフを取り出すと、それを後ろで俺を拘束している男の脇腹に突き立てる。

「ギッ……うぐッ……!」

妙な奇声を発してその男は地面に倒れ込む。

俺に殴りかかってきた男も慌てて立ち止まった。

その隙が命取りになるんだぜ？

ゴッ。

俺は正面の男の鳩尾みぞおちかかとで蹴る。

そして、情け容赦なく、まだ倒れまいと踏ん張る男の顔面にもう一方の足で蹴る。

キックはかなりの隙になるので、こういうバカな連中を相手にするときくらいしか使えない。

「このガキイ……!」

ナイフを片手にする暴漢、仮にこの暴漢を“暴漢D”と名付けよう。

まあ、ナイフをちらつかせるあたり、こいつは超能力者でも無ければ大して強くもない。

男は一切描写されることなく倒される結果となった。

俺のどこを刺してやるうかと悩んでいる間に、逆に俺がナイフでソイツの腹を一突きにしてやった。

“暴漢D”という名前を貰ったにも関わらず、その名を一切使わないまま敗北した。

残る暴漢はただ1人。

超能力をもっていると言っていたが、本当かねえ……。

「にーちゃんなかなかやるやないけえ……。でもなあ、社会にはルールっちゅうもんがあるんやで。おっさんがしつかり上下関係っちゅーもんを教えたるわ」

ルール？上下関係？

知るかよんなもん。

ほざくなら勝つてからにしろよ。

「アンタ超能力者？どんな能力もってんだ？」

それでも敬語は使わない。

だって、こんな社会からハミ出したクズ人間みたいなヤツに尊敬の念を抱く必要性が一体どこに？

どんな超能力だろうが隙はあるんだよ。

隙があればこっちのモンだ。

ヒュン と、俺の頬を何かがかすめる。

それがおっさんの右拳であることはすぐに分かった。

ただ、とにかく速い。

もうなんとなく能力は分かった。

「ワイの能力はなア・・・」移動速度に×10する能力』や。

さすがにアンタでもよけれるモンちゃうで・・・？」

「・・・」

速度が速まれば必然的に威力も高まる。

で？

それが俺に、よけられないって???

「じゃあ今から殴るからな？うまくよけるよ？」

おっさんはそう言っつて、わざとらしく拳を後ろに振りかぶる。

なめんじゃねエよ。

ビュン。たしかに拳を振る音を聞いた。

俺がその程度のパンチをよけられないイイイ・・・？

ンなわけねエだろ・・・!!!!!

おっさんの放った一撃はたしかに直撃していた。

俺のナイフに。

俺は、というと、おっさんの頭を使っつておっさんの後ろに回避していた。



「あゝあ、つまんねえな……」  
俺は路地裏にて、ナイフを片手で放り投げたりくるくる回したりと、弄んでいた。

地面には気絶した暴漢4人。そして、死亡したおっさんが1人。  
やる事なんて何もねえ。

何もかもが、無気力だ。  
俺はナイフに鞘を取り付け、立ち上がる。  
もうココには特に用はない。

元々近道程度に入っただけだし。  
帰るか……。といっても、家はないので公園に。  
またホームレスに逆戻りだよ。

もう何日も引きこもってた所為で、自分を泊めてくれるような親密な友人などいない。

結局また来た道を引き返すだけ

ダメだ。

どこからか殺気を感じる。

「誰だ!？」

返事はない。

なぜ姿を現さない？

パン!!!!!!!!!!!!!!

銃撃音だ。

狙いはもちろん俺。

俺は鞘に入れたままのナイフで銃弾を弾き飛ばす。

こんな芸当出来る人間はなかなかいないが、街中で銃を撃つにんげんもなかなかいない。

「オイ、そろそろ出てこいよ」

銃弾の角度から相手の位置を計算し、その場所に向かって話しかけた。

すると、物陰から1人の男が登場する。

見覚えは、ない。

しかし1回見ると忘れられないような、そんな男だった。

男は真っ黒い服を着ていた。それも、膝まであるコートのような大きい服だ。

服とは裏腹に、髪の毛は真っ白い。

おまえに、顔の上半分を覆い隠す灰色の仮面まで付けていた。な？忘れられないだろ？

俺はナイフをボロボロの鞘から抜き、構えた。

刃こぼれはしていない。

1万円も使った甲斐あつたぜ。

「まあそう身構えるな。さっきのはほんの挨拶だろう？」

ある街の路地裏にて（後書き）

主人公を交代しました（爆笑）

人生なかなかうまくいきませんね^^

感想などお気軽にお願いします！

バトルスタート!!!

挨拶・・・????

今のが？

完全に殺す気だっただろ？

カチャリ。男はまたもや俺に銃口を向けた。

そして

パアン！パアン！！パアン！！！！！！

銃弾を3発、放った。

うち1発は壁に跳弾する。

いちいち銃弾を弾くのも面倒なので、無理やり体を捻り、壁に逃げる。

壁に逃げるといふより、足だけで壁をよじ登る。

そして2手目が来る前に、持っているナイフを男に向かって投げる。

しかし男は、どこからか取り出した刀でナイフを弾き飛ばした。

刀といっても、長さ的には大刀ではなく、脇差程度の長さ。

「・・・っツ!？」

この態勢で銃弾はマズイ。

俺は無理やり壁キックをして、エアコンの室外機を掴み、それをそのまま引きちぎった。

勢いで落下する際に、それを男にブン投げる。

これが後に俺の必殺技になるかもしれない、『必殺 時間稼ぎ』である（結局ならなかった）。

受け身をとって地面に着地。

すぐさま男を振り返ると、現在俺の唯一の武器であったエアコン室外機は、4つに切り刻まれていた。

その代わりに、男の手には先ほどと同じ脇差程度の長さの刀が、もう1本。

どうする俺!?

すぐさま逃げる

正々堂々戦う

自害

どうしよう……。本当にどうしよう……。……。  
なんで選択肢に“自害”なんて作ってしまったんだろう……。  
いや、どうせ死ぬくらいなら最後まで俺は男として、いや、漢おとことして戦ってやる。

惨めに逃げるなんて死んでも嫌だ!!!

だったらどうする。

どうやって勝つ?

いや、この場を安全に切り抜ける事優先か?

いや、それでも意地でも勝ってやる……。

男のプライドだ!

俺は男の方へ全力で走った。

大丈夫。策はある。

距離が10mほどになった瞬間、俺はポケットから“ソレ”を取り出し、上へ投げた。

そう、ナイフと一緒に買った、『スーパー!!!砥石といしくんSUPA R』である。

仮面男は“ソレ”を目で追う。

気づいた時にはもう遅い。

俺は左拳を男の顔面に打ち付けた。

男は2〜3mほど転がる。

その時、刀を一本落とした。これはチャンス!!!!

刀を回収し、男から距離を取る。

しかし、その刀に違和感。

とても、軽かったのだ。

よく見るとその刀身には一直線に無数の穴が空いていた。軽量化の為に、強度を犠牲にした……？

「クツククク……。やっぱり強いな貴様はア……」  
男は、口周りについた自分の血を拭いながら立ち上がる。

「てめえ……俺のことを知ってるのか……？」

「ああ、知ってるさ。嫌というほどにな」

俺はちつとも見たことがない。

そもそもこんな総白髪の若者見て忘れろってほうが無茶だ。

「まあお前は俺のことを知らないと思うがな……？」  
なんだそうだったのか。

俺の記憶力は間違っちゃいなかった。

「お前……、名前は？」

それでも一応名前を尋ねる。

「呉織……、天義だ」

「はあ……。これまた覚えにくっそーな名前を……」

「貴様に言われたくはない」

まあ、秋雨だもんな……。

普通はあきさめって読んじまうもんな。

普通に読まなくても、“しゅうつ”てなるし……。

「さあ、休憩は終わりだ……。第2ラウンドの始まりだ……」

「チツ……。血の気多いなあ……」

俺は極端に軽い刀を左手で握り締め、天義は右手で握り締め。

そして、向かい合う。

いつでも撃てる。

お互いがお互いのさぐり合い。

見極め、最高のタイミングを探す。

そして

パキイイン！！

最初に動いたのは天義だった。

しかし、突いたその刀身は、根元から折られていた。  
「……………」

あまりの予想外の自体に、天義も秋雨も動けない。  
これは、秋雨がやったものじゃない。

「ハイハイ。喧嘩は一時終了ですよー」

「……………ツ！？」

突然のゴング。

この緊迫した状況に突然、少女の可愛らしい声が響いた。

「貴様……………誰だツ！？」

「失礼ですね……………。人に名前を尋ねるときは自分から先に名乗るのが礼儀では？」

もつともだ。

「くつ……………。俺は……………、呉織て」

「あー。別に言わなくていいです。聞いてませんので」

「ぐツ……………」

天義はそうとうイラついているようだ。

「私は七瀬愛理と申します。私があるのは秋雨さんだけなので、天義さんは帰っていただけますか？」

名前は途中で拒んだハズなのに…………。

「そういう訳にもいかない。俺はこいつと戦っている最中なのだ」

「なんですか？この刀と同じ目に会いたいんですか？」

この刀と同じ目に…………。つまり、真つ二つにしてやるうかのクズ野郎、というなの意味だろう。

「チツ……………」

天義はおとなしくどこかへ去っていった。

「なんかよくわからんが、助かったよ」

「どういたしまして」

愛理と名乗る少女は、ニコツと微笑んだ。

「ところで、用つてのは？」

「ああ、そうでした。少し付いてきて欲しいんです」

「どこに？」

「行つてからの秘密ですよ」

そう言い、愛理と名乗る少女は俺の腕を掴み、走り出した。

「俺はアンタの事をなんて呼べば？」

「うん……。普通に愛理でいいですよ」

「そうか……」

よく見ると、俺の通っていた光星学園の制服を着ている。

「アンタ、俺と同じ学校なんだな。よろしく」

「ええ、一応クラスメイトなんですが……」

「え？ そうなのか？ にはしては見覚えないけどなあ……」

ましてや、同じクラスに金髪なんていたら忘れる訳がない。

「ええ、最近転校してきたばかりなので」

最近……。俺が学校に行かなくなつてからか。

「こんな時期に？」

「はい、こんな時期に」

……。

付いて行くのはいいが、この道はどう考えても俺の来た道だ。

しばらく走ると、突然愛理は止まった。

「着いたのか？」

「ええ。着きましたよ」

どう見ても他人の家だ……。

「ここって、たしかクラスメイトの……、秋瀬凜々の家？」

「ああ、そうですね。一応」

「なんでこんなところに……、てかなんで玄関がボロボロなんだ？」

「いえ、見て欲しいのは家の庭なんですよ」

愛理は門を開け、中に侵入する。

「お、おい……。勝手に入っていいのか？」

「いいんですよ別に」

「適当だなー……。」

門から玄関までは3mほどあり、そのスペースは庭になっていた。  
そして、庭の中には、

大きな、血溜まりがあった。

## 再び始まる平穏な日々

「断る!!!」

「えー・・・」

そこは廃墟だった。

秋瀬家にいた俺たちは警察が来そうだとということで、誰も使っていない廃墟に場所を移した。

事情聴取とかめんどくせつ。

愛理はボロボロのテーブルに腰をかけ、俺は床にあぐらをかいている。

俺はすべての事情を聞き、私たちに協力してくださいという申し出を断った。

「そもそも俺は兄貴が嫌いだった。ナイフだって兄を殺すために買ったナイフなんだよ」

「・・・殺す殺すって、最近は何騒ぎですね」

「あいつにだって殺されるに値する理由があるんだ」

「そうですね・・・」

深追いはしてこないらしい。

そっちの方が俺としてはありがたい。

「無理にとは言いませんよ。また気が向いたらいつでも声をかけてください」

「ああ、そうするよ」

愛理は立ち上がる。

「あ、そういえば」

「・・・?」

「来月からまた学校が始まりますので、来てくださいね・・・」  
「学校・・・ねえ。まあ暇になったら行くよ」

愛理はかすかに微笑んで、この家（廃墟だが）を立ち去った。  
その時俺は思うのだった。

この廃墟、新しい家になろう！と。

約1ヶ月後の事だった。

その廃墟はもはや新しいハウスマイルとして確立していた。

天井はかるうじてすべて無事だったし。

布団も持ち込み、家としては十分な出来栄えだった。

ガスコンロも新しいテーブルもある。

焼けてなくなった制服も新しく買ったし、あとは学校に行くだけ

さ！！

ちなみに、教科書類はあえてまだ買っていない。

手ブラで学校に行くなんてなんかテンション上がるっ！

そう思い俺はマイホームを出るのであった。

と、思いきや。

「おはようございます。今日もそこそこいい天気ですね」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

家から出た瞬間、愛理に遭遇した。

「待ち伏せかよ・・・・」

「ええ。秋雨なら来ると信じてましたから」

信じていた、ねえ・・・・。

こいつの言ってる言葉はどこからどこまでが本気が分からない。

「もう行こうぜ」

「あ、はい」

俺に付いてひよこひよここと歩いてくる愛理。

「でも兄がいなくなっただっていうのに、ずいぶんあっさりですね」

「ああ。そうだな。母さんも今はどっかの民宿で泊まってるらし

いよ」

「お父さんは？」

「父さんは・・・・、とつくに死んだよ」

「まあ知ってますけどね」

「性格悪っ・・・・・・・・！」

ちなみに父は剣道の達人で、仕事熱心な正確から事故死らしい。ということも愛理に話したら、案の定すでに知っていた。

「お前はなんでそんなに色々知ってるんだ？」

「宇宙人だからです」

「うるせえよ」

なんだかんだ言っではぐらかされた。

「ところでお前、この前の、どうやったんだ？」

「？ 何をですか？」

「ほら。あの刀をスパーンってやつ」

天義の刀を根元から切断したヤツ。

おそらく超能力だろうと思われる。

「あー……。知りたいですか？私の能力っ?!」

横にならんで歩いてきた愛理は、スピンをかけて俺の前で後ろ歩きになった。

「おう。知りたい知りたい」

「そうですか」

すると愛理はまたスピンをかけ、俺の隣に戻ってくる。

「私の能力はですね。ワープホールを作る能力なんですよ」

「……？ワープホール？それって、時空移動ーみたいなヤツ？」

「そうです。ホラ、こんな風に……」

そう言つと、愛理は右の手のひらに赤い小さな魔方陣のようなものを浮かべる。

「これは入口です」

次に、左手に青い小さな魔方陣を浮かべた。

「で、こつちが出口。この赤い方にもものを入れると、青いほうか

ら出てきます」

「ふうん……。で、それがなんで切断？」

「まあ見ててくださいよ」

愛理はその魔方陣を左手だけに固める。

左手には向かい合うように赤と青の魔方陣がある。

「お、あつたあつた」

急にしゃがみ、木の棒を拾い上げた。

「いいですか？この木の棒を赤い方に入れると、青い方が

ら出ますよね？」

愛理は棒を掴んだまま、赤い魔法陣に真ん中くらいまで入れた。その上半分は青い方から出ている。

「この、物体を途中まで入れている時にこの魔法陣を消すと・・・

」

スパッ

魔法陣が消えるのと同時に、木の棒はまっぴたつになっっていた。

「はー・・・なるほど。あつちの世界にある方と、こつちの世界にある方で分かれるわけか」

「その通りです。これなら基本的に物体の硬度は関係なく切断できます」

なかなか賢い使い方だな。

そんなこんなをしている内に、学校に着いた。

まだ爆破痕は残っているが、教室の修復は済んでいるらしい。

ここでまた、あの平穏な日々は再開するのだろうか。

**再び始まる平穏な日々（後書き）**

やっと日常的な描写ができます・・・。  
お気軽に感想ください。

## 現実

俺と愛理は教室に到着する。

だが

「俺の席って・・・どこ？」

何分、数週間休みつばなしだし、おまけにきつと席替えだつてしているだろう。

「あー・・・、秋雨の席はそこですよ」

「そうか。さんきゅ」

愛理が指さした席に荷物を掛け ようと思つたが、俺は手ぶらだつた、特にすることもないのでとりあえず着席した。教室の風景を見渡す。

それは紛れも無く、俺がかつて通つていた学校そのものだった。何も、変わつていない。

中には俺の存在に気づき、友人とヒソヒソと会話する者もいた。不思議と悪い気はしない。

「秋雨くん。そこ私の席なんだけど・・・」

「・・・？」

ふと声の方を見上げると、手提げ鞆を持ったうちのクラスの委員長、春夏秋冬ひつせ 千夏ちかが立っていた。

こいつはアレだ。

名前に“夏”が2つ入つてる奴だ。

苗字も珍しく、“春夏秋冬”と書いて“ひととせ”と読む。なかなか妙な名前だ。

常にクールな委員長である。

「アレ？ここ、千夏の席？あ、ゴメン・・・」

席を千夏に譲り、そして愛理の方を睨む。

「てめー愛理。俺を騙したな!？」

「おーっと失敬。秋雨の席は春夏秋冬さんの2つ前の人のさらに

斜め前の席でした。うつかりうつかり」

「いや、どう考えても間違えようが無いだろうが……！チツ……」

俺は本当の席に荷物を掛け　　ようと思ったが、よく考える  
と俺は手ぶらだった　　、特にすることもないので着席した。  
すると突然。

「ん？お前ひよつとして、秋雨か？」

右隣の席の少年が声をかけてきた。

こいつはたしか、御巫みかなぎ隆たかし。

俺の友達で、やつぱり名前が変だ。

“御巫”と書いて“みかなぎ”と読む。

俺が言うのもなんだが、このクラスには妙な名前が多いのだ。

「あ、ああ。隆か……。俺だよ、秋雨だ」

「おおお！！全然気付かなかったよ！でもなんで金髪にしたんだ  
?!」

「ん……。あ、ああ、コレね。コレはアレだ。気分転換ってやつだ……」

本当は色々と理由がある訳だが……。それは伏線ということでも多くは語らないようにする……。

「んん???それになんか瞳の色も赤い気がする……?」

「か、カラコンだよカラコン……」

それも伏線ということNGだ。

ふと気になり左隣の席を見る。

そこには、秋瀬凛々あきせ(りり)が座っていた。  
いつもならまっ先にぺちゃくちやと喋りかける性格だが、今日は  
やけにおとなしい。

そうか、そういえば姉が犯罪者になったとか……。それで……  
……。

「よー凛々。久しぶり」

思わず話しかけてみた。

「ん？ああ、久しぶり　　て、どしたのその髪！？そしてその目？！」

かくかくしかじかでかくかくしかじかだ。  
例によって適当にごまかす。

「ふうんイメチェンねえ……。まあココ私立だけどそのへん規則がゆるいもんね」

「これからは俺、イケメンを目指すぜ……。！」

「イケメン（笑）」

「かつこわらいとか言うなー」

凛々の顔にはようやく笑顔が戻ってきた。  
ガンッ

「ナニ笑ってんだよ……。！」

「！？」

クラスメイトだ。

それも、タチの悪い。

そいつは凛々の机を足蹴にし、傲慢な態度で言った。

「犯罪者の妹のクセに呑気に笑ってんじゃねーよ……。！」

「ご、ごめん……。なさい……。！」

「謝って済むんなら言っつてねえよ」

なんだコイツ……。

「オイ！なんとか言えよ、このッ」

それ以上言わせてはいけない。

そう思った俺は、長年悪い悪いと言われ続けた目付きをフル活用して睨む。

金髪&灼眼の効果もあつてそいつの表情は固まっていた。

「この……。なんだよ？」

「ッ……。お前にはカンケーねえだろ……。！」

捨て台詞を文字通り吐き捨て、そいつは去っていった。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「大丈夫か？凛々・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

凛々は黙って俯くだけで、喋ろうとはしなかった。

「凛々。もう授業が始まる・・・。机、戻そうぜ・・・」

俺に顔を見られないように立ち上がった凛々の目には、涙が滲んでいた。

## 雑な馴れ合い

1日目の授業は、とても早く終わった。  
なぜなら全校集会だけだったからだ。

まあ、そうだよな……。

1日の全日程が終わり、俺たちは帰路についた。

自宅（仮）は学校の近くなので、十分に歩いて帰ることができた。

「一緒に帰ろうぜ秋雨ー」

「うわっ」

クラスメイトの御巫隆が、急に俺の背後から話しかける。

「どうせ暇なんだから？帰ろうぜ」

「あ？まあいいけど……」

「あ、でもお前たしかバス通学じゃなかったっけ？じゃあバス停まで……」

「いいや。歩きになった」

「？そうなのか？」

「ちよいとお引っ越してな」

「そうかそうか……！」

あ、そこまで驚かないんだー……。

「確かお前ん家と同じ方向だから……うん」

隆の家には何度かいったことがある。

そのときは、ああ。

そういえばあの時、千夏と凜々も一緒だったな……。

たしか千夏は隆の幼馴染だったっけな。

千夏とは隆経由で知り合った。

凜々は……、たしか兄だ。

兄の御鷹に連れられて行った家に、当時クラスメイトだった凜々がいた。

といつても小学校時代の話だ。イマイチ覚えていない。

「ああ、もう行くうぜ。秋雨」

「あ、ああ」

「私もご一緒してよろしいですか？」

うわ……。。

出たよ……。。

「ああ、転校生の……。七瀬さん？……。だっけ？」

「ええ。呼び捨てでいいですよ？私もあなたのこと呼び捨てにしますから」

「うわっ……。雑な馴れ合い方……。」

「何か言いましたか秋雨？」

「うん、ぶっちゃけ」

「……。内容については深く言及しません」

他人に『私もあなたを呼び捨てにするわてへぺろっ』とか言う

人初めて見たよな。

「で？ご一緒っていうのは？何に？」

「何って、帰宅にですよ。き・た・く」

愛理はくるつと1回転し、隆の顔をのぞき込む。

「まあ、別にいいけど……。なんで？」

「私が集団下校を望むのに理由は必要ですか？」

「いや、特にはごさいませんが……。」

なんで急に敬語になったんだ？

「まあそういうことなら。どうせなら千夏たちも混ぜようぜっ！」

隆は帰宅準備をしている春夏秋冬千夏に目を向ける。

千夏の隣には、凜々がいた。

あの2人はいつも仲いいもんな。

「おい千夏！それに秋瀬も！」

「何？」

「な、なに・・・？隆くん・・・」

「みんなと一緒に帰ろうぜ」

「一緒に？なんで急に？」

「いや、新人の愛理ちゃんにこの町を案内してやるうと思っ  
てさあ。ダメか？」

この町を・・・案内、ねえ。

コイツの場合逆に案内されるのがオチだと思  
町のこと全部知っててもおかしくない。

「別にそれはいいけど・・・。愛理さんはもう引越してきて3  
ヶ月は経つわよ？もうこの町には慣れてるんじゃない？どうかしら  
？」

「いえいえ、覚えたのは学校から家までの道のり程度で・・・。  
ホラ私、転校してからなかなか友達できないじゃないですか？だか  
らなかなか外に出るにならなくて・・・」

友達いないとか他人に堂々と話せることじゃない気がする。

「さすがに転校生が転校2日目に髪の毛を金色に染めたら誰も近  
づかなくなりますよね」

「それ地毛じゃなかったの!？」

「私、純血の日本人ですよ？それにその髪の毛の人に言われたか  
ないです」

「ぐっ・・・」

そうだったよ・・・畜生・・・。

「それにほら、私ってなんか色々完璧じゃないですか？孤高の鷹  
じゃないですか？漆黒の夜に舞う黄金の不死鳥って感じじゃないで  
すか？」

「自分を過大評価しすぎだろ・・・」

「・・・。蒼天の戦場を駆ける黄金の呂布じゃないですか？  
さすがに近づけないオーラありますよね？」

「まあ戦地でピッカピカの鎧兜着た変態には近づきたくないわな  
！・・・」

倒されたやつ、『あんな変態に負けるなんて屈辱の極み！』てなるわ。

「愛理ちゃんって、面白い子だな」

隆が俺に小さく耳打ちする。

「そうか？」

隆は小さく頷いた。

「ようっしー！じゃあ行くっぜー！！」

男子でも女子でも分け隔てなく接する。

それが隆の、俺とは違うところだな、と。俺はそう思った。

雑な馴れ合い（後書き）

どうでしたか？

気軽に感想くださいな。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2758z/>

---

僕の平穏なる日常はやがて歴史を大きく変えるような世界の危機に変化するこ

2012年1月6日05時45分発行